





——元仁元年（一二二四年）。

鎌倉の幕府を討ち倒し、再び帝のもとに政治を取り戻さんとした、後鳥羽上皇の挙兵より三年が過ぎていた。焼け落ちた寺社、主を失った公家の邸宅。いまだ戦乱の爪痕生々しいみやこを闊歩するのは、六波羅に詰める御家人たちだ。

かつての平家の本拠地は、いまや鎌倉の武士たちの居城である。しかし御家人どもが鎌倉の威光をたてにくら警備の眼を光らせても、みやこの治安は戻らぬままだ。大辻では日ごと寺社の悪僧どもが暴れ、盗人が出、夜ごと廃屋に火が上がった。

王法地に落ち仏法乱れ、いまやまさに末法の世であると、誰もが言葉をささやき交わす。浄土を求め一念に救いを求める新たな仏道があちこちで起こり、先の見えぬ世を嘆き、これを継る者も多かった。

「くああ……」

そんなみやこの片隅。戦乱以来焼け落ちたまま放置されている寺の、本堂の屋根で。板葺に寝そべる娘の姿がある。

歳は十を少し出たところと見えた。欠伸を噛み殺す細い顎に首筋は艶めかしいほどに白く、日焼け痕すら見当たらず。肉付きは薄く幼さも多分に残ってはいるものの、娘の

容貌は襤褸布と大差ない衣には不似合いにうつくしい。

墨染めの衣から伸びる脚をぱたりぱたりと揺らし、退屈に頼杖をついて吐息。伸び放題の髪の毛の隙間から、仏頂面でみやこの町を睥睨し、娘は不機嫌に齒を軋らせる。

娘の名はぬえ。

かつてこの平安京たいらのみやこの夜を睥睨し、その恐るべき鳴き声にて人々を震え上がらせ、帝すら脅かしたという大妖怪、〈鵺〉である。

近衛帝、二条帝を恐れさせた〈鵺〉は辟邪の武、摂津源氏の長である源三位頼政げんさんみよまさの矢にてその正体を暴かれ、討たれたと伝えられているが——しかし、ぬえは今もこうしてみやこの片隅に潜んでいる。

頼政の息子たちは以仁王の挙兵で命を落とし、平家も壇ノ浦で海に沈んだ。藤原の家も衰え、先の帝すら流罪とする混乱の時代である。みやこで彼女の面倒を見ていた化狸も、身内で相争う人間の世に辟易したと言ひ残し、佐渡へと姿を隠してしまっていた。己を知るものも既になく、畏れる者もないこのみやこに、なぜいまだにとどまり続けているのか——ぬえ自身、その理由は良く分からぬままだ。

ぬえが暮らすのは右京の廃寺である。往時には功德で知られた名利だと言うが、先の乱に端を発した騒動で焼け落ちて以来、近づくものもない。燃え尽きた伽藍の下には、助けを求めて押し寄せた人々の骸がいまだ埋もれたままだ。

半ば燃え落ちた廃屋は昼なお薄暗い気配に満ち、夜な夜な怪しげな炎が飛び交うのを見た、見るも恐ろしき巨大な影法師が立ち上がるのを見たなどと、恐ろしげな噂もあった。それらはぬえの正体不明の力によるものであったが——それが人の目にどう映ろうと、ぬえにはさして興味もなかった。

どうせあの時に死んでいた命、もはや誰にも必要とされなくなった己を抱いて、ただ枯れた古木のように、ここでただ移り変わる人の世を見ていられれば、それでよかったのかもしれない。

——つい先日までは、そう思っていた。いたはずだったのだ。

「でてこい、化け物！」

がらり。炭になった梁を蹴り転がし、高い声が響く。大の大人でも近づくのをためらい、怖気づくであろう濃い妖気を前にして、いささかも躊躇を見せない威勢の良い声だ。

廃寺の中央、黒く煤けた参道を踏み分け、燃え落ちた伽藍の中央にずかずかと踏み入るのは、まだ声変わりもしている様子のない少年である。

年のころは十に届くかどうか。裾のほつれた紅の衣を纏い、背には煤けた大太刀の鞘を括りつけていた。戦乱絶えぬみやこにあって、遅しく生き延びる戦災孤児の風貌とも見えるが——少しばかり様子が違う。少年の頬は血色も良く生氣に漲り、その手足は力強い。



なによりも目を引くのは、短く刈ったくせの強い髪だ。

まるで秋に実る稲穂を思わせる、黄金色なのである。そして、意志の強さを感じさせる眉の下に輝くひとみもまた、同じ黄金色。

整った容貌は、怪しげな廃寺という立地も相まって、彼の出自に疑念を抱かせるに十分であった。いずこの貴人の落胤か、はたまた神仏、妖鬼に類するものか。人目を引く姿を気にする様子もなく、少年は声を張り上げる。

「居るのは分かってるんだ、でてこい！」

（――誰が出ていくかっての）

燃え残った庫裏の奥、梁の上の暗がり以身を伏せ、ぬえは細い眉をしかめてうんざりと呻く。騒がしいのは御免こうむるというのに、少年は諦める様子なく何度となくぬえを呼ぶのだ。

「どうした化け物！ 返事くらいしたらどうだ！ それとも怖気づいて逃げ出したのかよ！ 大妖怪なんて威張りやがって、見かけ倒しもいいとこだな!!」

廃寺の中に響く叫びの余韻が、静かに消えてゆく。正体不明に身を包み、なおも沈黙を守るぬえに、少年は大仰に肩をすくめてみせた。

「なんだよ、本当にいないのか？ ははあ、さては怖気づきやがったな。情けない奴め。まあ、おまえなんて正体がわかってりや何も怖くないもんな。

……そうだ、いいこと思いついたぞ。おまえがもう悪きできないように、おまえの正体、みやこ中に言いふらしてやる」

(……あの野郎！)

とんでもないことを言い出した少年に、ぬえは背を震わせた。畏怖とともに在る妖怪にとつて、真実を見極める力というのはなによりの毒である。恐怖と正体不明をその力の根拠とする妖怪〈鵺〉にとつて、それは致命のものとなりえた。

ぬえは舌打ちとともに立ち上がった。地を蹴り、身を潜めていた屋根の梁から半壊した屋根の上に飛び上がる。

「うるさい小僧だな。見逃してやろうと思ってたのに」

「はん、やっぱりいたな、化け物女！」

してやったりとばかりに笑みを見せる少年。謀られたと分かっている、ああ言われてしまえばぬえは出てこざるを得ない。みすみす少年の企みに乗ってしまったことに、ぬえは不機嫌に齒を軋らせる。

「さあ、覚悟しやがれ化け物女！ 今日こそおまえを討ち滅ぼしてやるぜ！」

威勢良く叫ぶ少年に、ぬえは鼻で笑って脛を引き下げた。

「できもしないことを喚くなよ。持ち主もいないお前に何が斬れるってんだ、獅子王」  
「馬鹿にするな！」

激昂とともに少年が背の大太刀に手をかけた。刃渡りだけで三尺五寸余りの大業物、少年の手足ではとても扱い兼ねるはずの代物だが——少年はそれを苦も無く抜き放つてみせる。

が、それもそのはずだ。少年が構えた太刀の刀身は、半ばほどで折れ欠けていた。彼の無惨な得物を見下ろし、ぬえはけられけらと笑う。

「それみろ、そんなもんでわたしが斬れるもんか」

「やってみなくちゃわからないだろ！ 覚悟しろ、鶴！」

叫び地を駆ける少年が、猿のごとき身のこなしで朽ちた伽藍を駆け上がり、鋭く太刀を振るう。ぬえは背の羽根を広げ、取り出した槍を手にそれを迎え撃つ。

日に輝く銀光がふたつ、廃寺の中で閃いた。



ぬえが、この不思議な邂逅を果たしたのは半年ほど前のことだ。

化け狸の団三郎と別れて以来、気の向くままに伊豆や坂東にも足を延ばしてみたが、

結局のところぬえの棲むのはこの古きみやこであった。

もともと、ぬえはここで生まれ、みやこの夜に結びついている。戦乱絶えず毎日のように争いが起こる王都であるが、その気になればぬえはいくらでも隠れ潜むことができる。

その日もぬえは、廃寺に近づいた商人を、黒雲とともに正体不明の種で追い払い、その畏れを喰らって腹を満たしていた。

そんな黄昏時。見事な大太刀の鞘を背負ってやってきた金髪の少年は、力強い双眸で黒雲の中に潜むぬえをはっきりと見定め、仇討だと宣言したのである。

わが名は獅子王。主、源三位頼政を滅ぼした妖怪鶴を退治に参った、と。

少年の語るところによると、彼は源三位頼政が帝より拝領した黒漆糸巻くろしつしゐまき拵、号を獅子王とする大太刀の化身であるという。

一度は頼政に倒されてなお、その怨念をもって摂津源氏を破滅に導いた〈鶴〉の仇討に來たのだと大真面目に語る少年——ぬえがまず最初にしたことは、彼の正気を疑うことであつた。

五条大橋の決闘でもあるまいし、稚児が段平を振り回すなど冗談にしか思えなかつた。まして、帝より下賜された源三位の佩刀の化身を語るなどなおさらである。かつての妖怪〈鶴〉の噂を聞きつけた背伸びしがちな少年——あるいは、摂津源氏の郎党、渡辺党

の子孫などが、伝承の真偽も知らぬまま武功を果たさんと無謀にも挑んできたのだろうと、そう考えたのだ。

しかし、いかなる経緯か、少年が手にするのはたしかに頼政が拝領した魔祓いの大太刀であったのだ。その拵えにぬえは見覚えがあったし、頼政の終焉の地となった宇治川の合戦で、獅子王の刃が折れたことも知っている。

彼の言っていることが出鱈目だとしても、件の獅子王がどうしてこのような場所にあるのか、それを振るう彼が何者であるのか。他に説明がつかぬのも確かなのである。

「さあ、覚悟しやがれ化け物っ！」

折れた太刀を構え、ぬえの放つ呪詛の飛礫をもとめせずに瓦礫を駆け上る獅子王。少年は小柄な体ですばしこく跳ね、宙空のぬえに斬りかからんとするが、空の上のぬえには流石に及ばない。ぬえは妖力を込めた短槍で獅子王の刃筋を打ち払い、背の羽根に絡めて地面に投げ落とす。

「く……ッ」

「なんだ、威勢のいいのは口だけだな？」

「うるせえ！」

かろうじて受身をとった少年に対し、ぬえは背中の中を羽根を広げ、その間に妖力を張り巡らせる。蛇頭の青翼と甲殻爪鎌の赤翼、異形にして非対称の翼は、ぬえの力の源だ。

翼に十分に妖力が行き渡ったのを感じ、ぬえは差し出した指先を狙い澄まして獅子王の頭へと向けた。

源三位頼政の弓——ぬえが受け継いだ頼政の執念、摂津源氏辟邪へきじやの一矢が放たれる。

「うお、危ねえっ」

鋭くこめかみを貫かんとした鏃を、獅子王は折れた太刀の刀身で受け止めた。鏃は跡形もなく消え去る。ぬえが力を練り込んで呪詛を込めた矢を、ただの一合で防いだのである。

「甘くみんなよ、化け物女！」

「ち、そこらのなまくらなら一緒にへし折ってやるのに」

伝わりところによれば、この国最古の歴史を持つ大和刀工千手院派の鍛えによる一太刀。帝を守護せんと献上され、鶴退治の功績をもって頼政に下賜されたことから、獅子王に妖を祓い魔を退ける力が備わっているのは間違いない。

「くそ、卑怯者め、降りて来いよっ！」

妖力を練り上げた礫を太刀の背で打ち払い、地面を転がりながら、獅子王は叫ぶ。

「でかい口叩くなよ、ガキの分際で。頼政の仇を討つんじゃないのか？」

「だったら、逃げ回ってないで正々堂々勝負しやがれ！」

「やなこった」

ぬえは小さく吐息し、胸を反らして獅子王を見下ろす。

「覚悟覚悟って、威勢のいいのは口ばかりじゃないか。頼政の太刀つてのはそんな軟弱なのかよ、ちびすけ」

「ちびじゃねえ！ 俺を子ども扱いするなっ！ 年だっておまえなんかよりよっぽど上なんだぞ！」

「はん、ガキじゃないか、どう見たって。自分の成りを見てから言えよ」

「おまえのほうがガキじゃないか！ 偉そうに言うなよ、ちんちくりん！」

「……言ったなこの野郎!!」

売り言葉に買い言葉。ぬえは我を忘れ、地上の獅子王へと打ちかかる。獅子王も折れた刀身をもってこれに応じ、鋼と鋼の打ち合わされる撃音が響いた。

閃く白刃、地を蹴る足音。打ち合わされる得物から火花が散り、夕闇に沈んだ廃寺を照らす。

ほどなく、二人は頭に上った血のままに得物も放り棄てて、お互いに掴みかかった。地面を転げ、大人げなく頬を引つ張り、髪を掴み、上へ下へと取っ組み合い。幼い外見そのままの、子供同士の喧嘩そのものだ。

「訂正しろ化け物女！ 俺はチビなんかじゃない！ 元々は刃渡り三尺五寸五分の——」  
「知るかよッ、お前こそ取り消せ！ 頼政は褒めてくれたんだぞ！ わたしの事っ」

「黙れ、じつちゃんを誑かしやがって、妖怪め！」

「お前こそ黙れ、なまくら!!」

ぜいぜいと肩を上下させ、馬乗りになった獅子王の額に、ぬえは思い切り頭突きを食らわせた。がつんという衝撃が頭の奥を走り抜け、視界が白く明滅して火花を飛ばす。

「……ツってえッ！」

「石頭め……ッ！」

仰け反った獅子王に、ぬえはもういちど頭突きを食らわせた。二人は絡まり合ったまま、焼け焦げた石段の上を転げ落ちる。

落下の衝撃にぎしぎしと焼け残った柱が揺れ、炭化した梁ががらと崩れた。正体不明の妖怪と、持ち主なくとも喋る太刀。口を開けば喧嘩となり、我を忘れての取っ組み合い。

この廃寺から人の足が遠のいた理由の一つに、それがあることをぬえは知らない。

一刻ちかくもそうしていただろうか。随分と粘ったが、ついに獅子王は疲労困憊となつて、肩で息をしながら膝をつく。

「くっそお……折れてさえなけりやおまえなんか」

対するぬえも満身創痍。地面に突き立てた槍にもたれかかるように、ぜいぜいと息を荒げている。いつしか日はとっぷりと暮れ、廃寺の屋根には大きな月がかかっていた。



「……いい加減に諦めろよ。お前には仇討ちなんて無理だ」

「うるさい！ 俺はじっちゃんの仇を討つんだ！ おまえを倒して、それで、——それで、っ」

——それで。

地べたに座り込んだまま、拳を地面に叩きつけて悔しがる獅子王。その傍らで、折れた大太刀の刀身がかたかたと震えている。

「俺に、もっと力があれば。もっと自由に動く身体があれば！ あの時、じっちゃんを守れたかもしれないのに！！ そんな、簡単に諦めきれももんかつ……！！ おまえだつて……おまえだつてそうだろう！ おまえは悔しくないのかよ！！ 木ノ下<sup>このした</sup>！！」

「……………」

懐かしい名を呼ばれ、ぬえは反論もできずに口を噤んでしまう。

（——本当に、刀なんだな、こいつ）

そうなのだ。ぬえも認めざるを得なかった。子供めいた取っ組み合いとは言え、ぬえと掴みあってまともな人間の子供が無事でいられるはずもない。

怒り、笑い、泣き、傷つけば血を流し、疲れもするし悔しさに震えて叫ぶ。どう見ても人にしか見えないが、確かに彼は、人ではなかった。

かつて、佐渡の化け狸、団三郎が語っていた。

年経た器物は、使用者の情念を感じ取って意志を宿すものであるという。団三郎ら化け狸はそうした器物の妖怪を操るのに長けており、彼らの育成に力を注ぎ、化術の助けとして使役するらしい。

彼もまた、そうして自我を得た器物の怪なのであろう。

もはや押し返せぬ時流のなか、僅かな兵で平家の大軍勢に立ち向かい、奮戦及ばず命を落とした源三位頼政。獅子王が宇治川でその最期に立ち会っていたというのなら――あの時噛み締めた無力感は、ぬえとて他人事ではない。

胸の奥、静かに燻っていた身を掻き筆らんばかりの後悔が熱を持つのを感じ、ぬえはそっと、服の上から腹の傷痕に触れる。

「……おい」

歯を噛み締めて肩を震わせ続ける獅子王に、ぬえはそっと声をかけた。

「やってみなよ」

「……え？」

こぼれる涙をぬぐい続け、目を赤くした獅子王に、酷い顔してんじやないとぼやきながら、懐の手布を渡してやる。

「頼政の仇討ちがしたいんだろ。獅子王」

ぬえは背中の中の羽根――赤青の左右非対称の翼の内の一本、鱗を生やした蛇の頭を持ち

上げた。身構える獅子王の前で、大口を開けた蛇は、げえと煌めく鋼を吐き出す。

からんと落ちるのは、細く薄く鍛えられた鋼。太刀の切っ先である。

宇治川の合戦で折れ、失われた、黒漆糸巻拵太刀・獅子王の片割れ。あの合戦の混乱の中で、ぬえが手にしたまま持ち去ってしまった破片であった。

「こ……これ、おまえ、っ」

「ほら、返してやったぞ。これできちんと一揃いだ。……刃が欠けてるから斬れないなんて、言い訳はさせないからな」

ぬえは獅子王に背を向け、両手をあげてみせた。背中の羽根は全部仕舞い、無防備な背中をさらす。突然のぬえの心変わりを前に、獅子王は動揺を隠せない。

「お、おい、いいのか？ 木ノ下」

「好きにしろよ。わたしの氣が変わらないうちにな」

「い、いまさら嘘だとかなしだからな！ 騙そうったってそうはいかないぜ！」

「……いいから早くしろっての。やる氣ないならやめるからね」

うんざりとした表情で、ぬえが背中越しに太刀の切っ先をに視線を戻すと、獅子王は素早くそれを掴みとった。

まだ不信を拭えない様子であったが、獅子王は折れた太刀の本身を構え、真剣な表情でぬえに対峙する。

「——ッ」

整った顔にわずかに浮かんだ躊躇を、かぶりとともに振り捨てて。金髪の少年は、きつく逆手に握った自身の切っ先を、力いっぱいぬえの背中へと突き立てた。

大太刀の刃先が、ざくと少女の柔肌に食い込むと同時に——

「——!?!」

鋭い鋼の先端は、するりとぬえの身体を通り抜けていた。刃先の食い込んだそばから黒い靄が溢れ出し、ぬえの白い肌を取り巻くように覆ってゆく。

蛇のごとく伸びる黒い靄は、一気に膨れ上がり——そのまま獅子王の顔を取り込まんと広がった。獅子王は飛び退くようにして切っ先を放り出し、眼を丸くして叫ぶ。

「な、なんだよ、これ!」

「これがわたし。これが〈鶴〉さ。いくら斬っても裂いても、わたしは殺せない。それができるのは、頼政の弓だけなんだ」

黒い靄の中、ぬえはそう言いながら、着物の前をはだけて白い肌をさらす。薄く肋の浮く脇腹に、深く残る腸袂の矢傷。

平安のみやこの夜に君臨した妖怪を、唯一ただしく見定め、射殺した傷痕。

ぬえは、源三位頼政の弓によって射抜かれ、その正体と命を暴かれた。

ゆえに、彼女はそういう妖怪と成ってしまったのだ。

「……………」

ぬえは細い頤を持ち上げ、ひゅおうと鳴いた。

紅い唇を震わせ、夜闇に響くはのどよぬえ鳥の鳴き声。

ひゅおうひゅおうと悲しみに焦がれ、みやこの夜に繰り返される、籠鳥のこえ。

——ああ、その姿、まさに。

頭は猿ましろ、

胴は貉むじな、

手足は虎とら、

尾は蛇くちなわ、

そして鳴き声は虎鵜とらつぐみ。

黒雲を纏い伝承を鎧う正体不明の怪物は、源三位頼政の恨弓でなければ、殺すことはできない。

——たとえ、百獣を従える獅子の王とても。

ひゅおおおう、ひゅおおおう。

白い喉を震わせ、ぬえは空を見上げて鳴く。

己の切っ先を握り締めたまま、獅子王は、そんな悲しげな鶴の啼き声を、じっと見つめていた。



たった数十年。妖怪の尺度でみればほんのわずかな時間で、世は大きく様変わりした。

かつての平家の栄華は遠い昔。後白河の犬も姿を隠し、武士の棟梁となった鎌倉の源氏嫡流も、わずか三代で途絶えたという。源平の争乱が過ぎたと思えば、今度は源氏が兄弟同士、御家人同士で殺し合い、その次は上皇が乱を起こす。ほとほと、人の世の絶えぬ争いに愛想が尽きたというのが、京を去った化け狸団三郎の弁。

そんな団三郎から、共に佐渡に来ぬかという誘いを断ったのが、ぬえには昨日のことのように思い出せる。

なぜそうしたのだろう。明確な理由は、自問しても見つからない。

けれど、ぬえには、妖怪〈鶴〉たる自分がみやこを離れて生きていけぬであろうことの。漠然とした確信があったのである。

「……………」

ぬえは今日もまた、朽ちた廃寺の一角で変わり映えのしない空を見上げ、喉奥を鳴らすようにして呻き、吐息する。

そんな少女に、すぐ傍らから答える声があった。

『なあ、木<sup>この</sup>ノ下』

「なんだよ」

『いい加減どつか出かけようぜ。ずっとこんなところじゃ退屈だ』

『五月蠅いな。そんな気分じゃないよ』

ぬえは邪険に応じるが、その傍らで声はなお続く。

『なーって。なんか腹も減って来たしさー。なーなー、木<sup>この</sup>ノ下ー』

いかなる不思議か、声はすれどもその主の姿は見えぬ。が、馴れ馴れしい口調は、少女と同じ年頃の少年のものと聞こえた。生意気な言い分に、ぬえはついに牙を剥き出して怒鳴る。

「なにが腹だ。そんなもんだら、お前！」

言葉と共にぬえが掴んだのは、傍らにあった黒漆糸巻袴の鞆だ。古びた一振りの大太刀がちやり、と小さく鐸を鳴らした。そう。声の主はこの大太刀、源三位頼政の佩刀、獅子王である。

「あと、馴れ馴れしくわたしを呼ぶな」

『なんだよ。木ノ下は木ノ下じゃねーか』

不機嫌なぬえに対して、獅子王は相変わらずの軽い口調。そこが我慢の限界だった。

「うっさい、黙れ！」



がんと鞘を屋根に叩きつけるよう放り投げ、少女は太太刀に背を向けて座り込んだ。黒漆拵の鞘は大きく跳ね、半ばほどで折れた刀身を晒す。

『あー！ おいつ！ 何するんだよ、拾えよ！』

「……知るか」

転がる太太刀はなおも鏢を鳴らして叫ぶが、ぬえは無視した。

大和刀工の千住院派になる三尺五寸五分の太太刀は今日も饒舌だ。彼が言葉をもったのはつい先日のものであるらしい。九十九年がどうだとか、喪が付くのがどうだと自慢げに話されたが、ぬえは我関せずと聞き流していた。

共に過ごすようになって知ったことだが、彼が人の姿をとっていられるのは一日のうちそう長い時間ではないらしい。ま二つに折れたことで、武器としての機能を半ば失っているせいもあるのだろうとぬえは考えていた。

『もっと大事に扱えよな！ 木ノ下！』

「うるさいな、いい加減にしないとへし折るぞ！」

『へん、できるもんならやってみやがれ、化け物女！』

獅子王の口喧しさにぬえはうんざりと吐息する。

（こいつが、ほんとうに頼政の刀なのかよ……）

かつて平家全盛の世にあって、歌壇にすぐれ文武に通じたとして知られる、摂津源氏

の源頼政。彼は、帝から拝領したこの黒漆拵の太刀を人に見せることを好まなかった。鶴退治の英雄、源三位頼政が自らの功績を鼻にかけずに振る舞うことを、世の人々は謙虚であると讃えた。が、その真実は、彼の屋敷で姿を変え名前を変え、共に暮らすぬえへの配慮であつたことは想像に難くない。

それでも敢えて。彼の最期となつた宇治川の合戦で、頼政がこの太刀を腰に佩き、摂津源氏・渡辺党を率い先陣を切つて戦に臨んだのは——絶望的な状況の中で、たとえ虚飾とも己の力となるありつたけを注ぎ込み、わずかな希望にでも望みを託そうとしたからであるのか。いまとなつては、知る由もない。

（余計なお世話なんだよ、いつもこいつも）

あの日の団三郎の誘いは、あるいはそれを見越しての事だつたか。あまり面白くない想像に、ぬえは不機嫌に牙を鳴らして寝返りをうつ。

「つたく、面倒ばっかり掛けやがつて、役立たずめ」

『役立たずとか言うんじゃないやねえ！ 俺はじつちゃんのために——』

「そんな様で粹がるなよ、なまくらめ」

『なんだと！』

彼の言葉が正しいなら獅子王はぬえよりも年長であるはずだが、その口調は生意気な少年そのもので、とてもそんな威厳は感じられない。

『いいぜ、相手になってやらあ。泣いても知らねえからな』

どろんと煙をあげて、獅子王が人型をとる。癖っ毛の金髪は怒気をはらんでふわりと逆立っていた。正体不明の化け物と、黒漆拵糸巻の大太刀が睨みあい、ぶつかり合う視線の間に火花を散らす。

いつもの調子のいつもの喧嘩。ここしばらくの日常となっていた取っ組み合いが今まさに始まらんとした、その時。

「——って、おい、どうした木ノ下？」

「しっ、静かにしろ！」

人気のない廃寺に、半透明の幽霊を引き連れて。

白い髪に片頬の傷。背には足元に引きずるような大太刀と、腰の短刀。

二刀を携えた半人半霊の男を二人が見つけたのは、まさに、そんな時であった。



その男の風体はあまりに異様であった。四尺七寸という途方もない長さの大太刀を佩

き、背腰には同じ拵えの腰刀。右眼から頬までを深く抉る刀傷、さらには傍らに従えた半透明の霊体。

だがそれよりも何よりも、常人とは纏う気配が違う。色濃く引きつれるのは死の匂い。男の魂魄はなかば死人と化している。彼の傍らに浮かぶ半透明の霊体は、死に誘われた浮遊霊ではなく、彼自身の半分死んだ魂である。

ぬえは警戒も顕わに、獅子王の本身を庇うように手元に引き寄せた。獅子王の抗議も待たず、己の纏う正体不明の濃度を高め、正体不明の種に練り上げた力を込める。切り離れた種を、ぬえが男に向け放たんとしたその刹那。

鎮ッ——

やおら、涼やかな鏗鳴りの音。

先程までの騒音に比べれば、はるかに小さなその音は——静かに、廃寺に響き渡った。

「……………」

ざわり。ぬえは背筋が栗立つのを感じていた。驚愕の叫びをかううじて飲み込む。

男の放ったわずか一音にて、あたりに立ち込めていた濃密な妖気が全て消失していたのだ。一陣の風が煙を吹き散らすように。陽射しが雨雲を切り拓くように。

廃寺は、怪物〈鵜〉の潜む魔窟から、朽ちた古刹へと姿を変えていた。

「あ、おいつ」

やおら立ち上がったぬえの袖をつかみ、獅子王が短く叫ぶ。折角隠れていたのに何を  
してるんだと眉を逆立てる彼には答えず、ぬえはただ茫然と目を見開き、男を凝視する。

「お前、今——何をした」

ぬえの白い顎を、つうと冷や汗がつたう。

声がか細く途切れ、握った拳の震えが抑えきれない。

妖怪となつて久しく感じていなかった、怖れが、少女の身体を支配していた。

「斬っただけだ。お主の纏う正体不明とやらをな」

隻眼を廃寺の上に向け、事も無げに男は言う。その意味するところを知りぬえは戦慄  
した。男の言葉が真実であるならば、彼は今、形も意味も定かでないぬえの放った〈怖  
れ〉を見定め、抜く手も見せずに断ち斬ったのである。

「話をしに来たのだ。隠れられていては話にならん」

「——お前」

ぬえの瞳孔が蛇のように細まる。

少女の決断は迅速だった。呪詛の礫を雨霰と男めがけて投げ付け、同時に廃寺の影が  
作る闇の奥に身を沈ませる。

ぬえの持つ正体不明の力とはその実体、いるといないの境を曖昧にぼかし、恐怖を煽  
る力だ。居もしない背後の足音、暗がりには潜む怪しい影。どこに潜むかもわからぬ相手

への恐怖。それらが〈鵜〉の力の源である。

影の中に潜み、滑るように男の背後に回り込んで。鋭く繰り出した短槍の切っ先と、左右三対の歪な翼の連撃が、男の胸を貫く——かに、見えた瞬間。

必殺のはずの槍の穂先は、何の前触れもなくすばんと断ち切られ。赤い甲殻の爪鎌と、牙を剥きだす青い蛇までもが、体液を撒き散らしながら斬り飛ばされる。

「——ツツ!？」

離れた地面にからからと転がってゆく槍の切っ先を、視線だけで見降ろして。ぬえはぎり、と歯を軋らせた。

「気を付けろ」

男は事もなげに淡々と告げるばかり。彼は黒衣の袖の中にゆるく腕組みをしたまま、大太刀の柄に手をかけてすらいない。

にもかかわらず。飛び出したぬえの衣は大きく裂け。

左右の翼とともに、踏み込んだ脚の腿から下までもが両断されていた。

「そこは先程、俺が斬った。迂闊に踏み込めば死ぬぞ」

感慨も感情もなく、ただ事実を読み上げるばかりの男の言葉。

それが意味するのは、ただ一つの事実。

男の太刀が、未来永劫に渡る時間すらも超えて、この空間を斬り裂いた——より正確

に言え、今もなお斬り裂き、続けて、いるということだ。地面に転がったぬえの足が、不定形にぼやけ、煙となって消えてゆく。ぬえは苦悶のままに膝を押さえて、尻餅のまゝに後ずさった。

「木ノ下！」

「ばか！ 出てくるな！」

ぬえの制止も構わず、獅子王が瓦礫の陰より飛び出した。怒りに逆立てた金髪をなびかせ、折れた太刀の鋭い切っ先を逆手に握り男へと斬りかかる。が、男はわずかな体捌きだけでそれを躲してみせた。

——鎮ッ。

再度、涼やかな鐔鳴りの音。不可視の斬撃を受け地に塗れる少年の前で、男は少年の手から奪い取った太刀の切っ先に視線を向ける。

「……元は刀であろうと、人型を得れば、人と同じ脆さを得る。まして、折れ欠けているというなら猶更だ。手入れもなしに刀は刀であることを保てぬぞ」

衝撃に咳き込み、苦悶を上げて地面に伏す獅子王。

男は静かに告げ、太刀の切っ先を彼の目の前に放り投げた。

「……なんだよ。なんなんだ、誰なんだよ、お前はっ」

脚を失い、もはや一步も動けぬまま、戦慄とともに訊ねるぬえに対し。

「妖忌。——魂魄妖忌。冥府よりの使いだ。黒漆糸撒拵大太刀・獅子王。源三位頼政の未練を斬りに来た」

胸元に提げた六連の輪を示し、静かに男は告げた。



「……冥府の、使いだア？」

——ぎしり。

突如響いた重苦しい音が、牙を軋らせるぬえの口元から発せられていたことに、彼女自身が気づいていたか。

「できるもんなら、やってみろよ！」



跳ね起きるや否や、ぬえは萎縮しかけていた全身を奮い立たせ、漲らせた怒気を一斉に撃ち放つ。呼び起こされるのは黒雲。二条の森より湧き出し、御所を包み、みやこを恐怖へと陥れた、妖怪〈鵺〉の力。

地を這うように滑る大蛇の群れ、不規則に弾かれ軌道を変える鎌。呪詛を纏う鋭き矢は、恨弓、源三位頼政の弓。獅子王に向けていたのとは段違いの、容赦ない密度の弾幕が男を取り囲む。

「好き勝手喋るな!! 誰が、誰が斬らせるもんか。——どいつもこいつも、よってたかって頼政のことを忘れようとしやがって!!」

「そうか」

我を忘れたぬえの暴走。それらを前に、男がしたことは単純だった。

これまでと同じように、腰の大太刀に手をかけ——静かに、鐸を鳴らした。それだけだ。

そう。それは抜刀どころか、納刀の瞬間すら見定めることのできぬ神速の太刀筋。

わずか一閃でぬえの弾幕はかき消される。力で強引に弾幕を相殺したのではない。無数の鎌すべてを一つ一つ斬り防いだのですらない。

男はぬえの正体不明の力を見極め、見定め、それ自体を斬ったのだ。

「妖怪の鍛えた楼観剣。斬れぬものなどにも無い」

「っ、ぎけるな!!」

ぬえは激昂と共になおも立て続けに弾幕を繰り出すが、殺意を込めた無数の鏃は、妖忌が四尺七寸の大太刀が鏑を鳴らすたび、あっさりと霧散する。

三度、四度。いくら繰り返しても、その結果は変わらない。

「逸るな、へ鶴」

ならばと、折れた短槍を構え立ちあがりかけたぬえを。

言葉だけで制し、妖忌は吐息と共に隻眼を閉じた。

「勘違いをするな。死神とは命を殺めるものではない。死ぬ定めのある者の前に現れるだけの、いわば道標。ただの事後処理の役人だ。それに恐れを感じるのなら、それはお主らが死を恐れているからに過ぎん」

——畏れる勿れ、死神の名を。

そう嘯き、妖忌はゆるりと腕組みをほどく。

「冥府とは死後の世界の運行をつかさどるものだ。今の冥府は十王の元、仏道に従い輪廻する魂を管理する任を負う。俺は、魂魄家にあつてその冥官代行を務めている、半死人だ」

その身に纏わりつくほどに濃い、死の気配。

言葉の通り、彼は半分死んでいた。妖忌の傍らに寄り添うように浮かぶのは、死して

体から抜け出した魂と魄なのである。

搔い摘んでいえば、冥官とは死後の魂の事務手続きを行う官吏である。それに大きな権限はなく、ただ、冥籍の記したとおり、死した存在を連れていく、ただそれだけの使い走りも同然の存在だと言う。

妖忌の語るところによれば、いまは度重なる戦乱で冥府も人手不足であり、彼は故あってその役目を引き受けているということであった。

「魂は死の後、輪廻をもつて巡らねばならん。それが今の彼岸の規範。守るべき生死のさだめ。それに乱れがあるならば、正常に糺すのが俺の役目というわけだ。そして——獅子王よ。お主の因果は頼政のそれを妨げている」

「……俺が、じっちゃんを……？」

隻眼の死神の指摘に、意味を飲み込みかねるように、獅子王は呆然と妖忌の言葉を繰り返した。

「源三位頼政が現世に残した未練。摂津源氏の棟梁として起ち、無念にも想い半ばで死した慙愧。宇治川の合戦のその執念が、お主を付喪とした。願っても斬れぬその身に与えられたのは、源三位の辟邪の武としての誇り。果たせなかった想い。そして、その娘、木ノ下と共に過すことへの執着。それらはすべて、冥界へと向かう頼政の魂を現世に繋ぎ止める楔となりうるものだ」

「でたらめ言うな！ 信じられるかよ！」

「獅子王よ。お主はあの娘を斬れなかっただろう。それが何故かわかるか」

ぬえの言葉を無視し、妖忌は獅子王の顔を覗き込む。

「そんなの決まってる！ わたしは、頼政の弓にしか——」

「違う。いかに〈鶴〉の力が強力とて、大和千住院の名工による辟邪の太刀。滅ぼせぬまでも断ち切ることは可能だったはずだ。にもかかわらず、お主がこの娘を斬れぬのは、お主が太刀ではないからだ」

「……俺が？」

両手を見降ろして。茫然と繰り返す獅子王に。妖忌は続ける。

「お主が付喪しとしてその写し身を得たのはいつか。宇治川の合戦。源三位頼政の終焉の地。摂津源氏一門が血を流し死したあの戦場だ。お主の本身たる、獅子王太刀が折れた、その場所だ」

つまり。

ここにいる獅子王とは。大太刀獅子王の写し身ではなく。

折れ、壊れた太刀の付喪神である。

折れた太刀は、戦の道具として本来の機能を果たすことはできない。同様に、折れた太刀の付喪神も、本来の意義と存在を失った、半端者なのだ。

「ゆえに、お主はその娘への復讐と、源三位頼政への執着を本義として生まれた。付喪とはそういうものだ。執着と無念を核に、所有者が残した想いを受け継ぐ。審神者の正しき力を経ずにお主がその姿をとり続けること、それは、お主がただの刃であることを止めるということに他ならない。人の手に寄らず、己自身で相手を見定め、斬ると斬らぬを決める。それはすでに太刀ではない。自らの意志を持って刃を振るう、あやかしだ」ぬえは思い出す。

獅子王は、ぬえを頼政の仇敵と呼び、復讐を叫んでいたのではなかったか。頼政に変わって、鶴を打つと叫んでいたのではなかったか。

彼は今、化け物と道具の境界にあるのだと、妖忌は言う。

「思い出せ。源三位はそのような怨讐を残して逝ったのか。志半ばで力尽き、未練のまま、世を呪うて死んだのか。その真実はお主らがよく知っているはずだ。

……獅子王よ。改めて問おう。お主は頼政の刃であることを止め、畏れを纏い、源三位の怨讐を受け継ぐあやかしとして、このみやこに名を馳せるを望むか」

「……………」

ぬえはそれを知っている。妖忌の語る化け物の姿を知っている。

それはかつて、ぬえが〈鶴〉として辿ったのと同じ道だ。

いつしか日は暮れていた。宵と夕が入り混じり、長い影が廃寺の地に落ちる。

妖忌は懷から小さな符を取りだした。割符にともる小さな鬼火を見、死神代行を名乗る男は告げる。

「あまり時間はないぞ。獅子王よ。再度問う。……お主はそれを望むのか。主への想いゆえに、刀であることを止めるのか。その娘と共に、あやかしとして生きるのか」

「俺、は……」

獅子王は小さく両の拳を握り締める。少年の金色の双眸に、逡巡がよぎるのをぬえは見逃さなかった。

「やめろ!! 耳を貸すな獅子王! 信用できるか! 殺されるだけだぞ!!」

ぬえが叫ぶ。が、妖忌はあっさりと首を振った。

「言つたろう。俺はあくまで代行だ。本職の死神ではない。馬鹿正直に冥官の任務とやらに拘るつもりもない。——ここで恨まれてお前達に尾け狙われるのも、冥府で源三位を敵に回すのも御免だ」

「信じられるかよ!! 第一、っ……!!」

今の獅子王が、折れた太刀の付喪であるなら。

それを直した時、そこにいるのは、今の獅子王とは別の、まったく違う、何かなのではないか。その推論を叫ぼうとして、ぬえは言葉を飲み込む。叩きつけるには、あまりにも悲しい結末だったから。頼政の最期を想い、意志を継ごうとした彼にとって、あま

りにも報われぬ終着であつたから。

詰め寄るぬえに、妖忌は静かに首を振る。

「然り。因果は遡れない。折れたままでいては、刀となることはできん。源三位の無念を引きずるはまだ。……だが、斬ることはできる」

「斬る……?」

「お主を絡め取る因果。歪めんとする怨讐。それを断つ。俺は、そのためにここに来た」  
そうして、黒衣の死神の問いは、はじまりへと戻る。

獅子王の前に膝をつき、目線を合わせて訊ねる妖忌に――  
わずかな躊躇いの後、獅子王は頷いた。

「わかった」

「獅子王!」

「やってくれ。……俺は、じっちゃんの刀でいたい。じっちゃんがもう居ないなら、なおきらだ」

「――そうか」

あまりにも早い決断。妖忌は緩やかに膝立ちとなった。魂魄の大太刀、楼観剣四尺七寸の柄に手が掛けられる。

「お、おいつ、やめろ!! やめろよ!! 獅子――」

神速の斬撃。不可視の一太刀。離別を前に、ぬえが咄嗟に飛び出そうとするが、

「木ノ下。——ありがとうな」

そう言つて、獅子王は笑つた。心からの笑顔と共に。

少年の笑顔に、ほんのわずか——ぬえが、その手を伸ばすのを躊躇つたその時。鎮ッ。涼やかな鐸鳴りが響く。

見惚れるほどに美しき、白刃、総身四尺七寸。ひと振り十殺を誇る、十夜斬の楼観剣。抜く手すら見せぬ妖忌の一閃と共に、がらんと地を転がるものがあつた。

鞘と共に、折れ砕けた獅子王の刀身が、およそ一尺ぶん。

因果を千切る断片となつて、からからと地を跳ねる。

「獅子王!!」

脚を引きずり、走り出したぬえの先、獅子王の写し身がふらりと傾いた。抱きとめようとしたぬえの手をすり抜け、金髪の少年の姿は薄らぎ、そして緩やかに消えてゆく。

摂津源氏源頼政の、宇治川の合戦とその敗北。

付喪となつた因果を失つて、彼もまたその存在を保てなくなつたのだ。

後に残るのは、黒漆糸巻拵えの、太刀の本身のみ。

「……………」



「これで、源三位の魂も安らごう」

楼観剣を腰へと戻して、妖忌は深く息を吐いた。

「てめえ!! なにをしやがったッ!!」

「折れた刀身ごと、その太刀の『長さ』を斬った」

「はあ!? 長さ……?」

「黒漆糸巻拵太刀、獅子王、三尺五寸五分。かの合戦で源三位が手にし、志半ばで折れ砕けた太刀。獅子王を歪めていたのはその過去だ。ゆえに、俺はその長さを斬った。宇治川での怨讐、因果とともに」

ぽかんと口をあけるぬえの前で、妖忌は地に転がった獅子王の刀身を拾い上げる。

それを見て、ぬえは息を呑んだ。なんという神業か。妖忌は、獅子王の刀身から、折れたという事実ごと一尺余りの「長さ」だけを斬りだしたのだ。元の太刀には一切傷をつけないままに。

雨を斬り、空を斬り、時を斬り。魂魄の刀は、全てを斬る。

「妖怪の鍛えたこの刃。楼観剣に斬れぬものは無い」

あとに残されたのは、二尺五寸五分の太刀である。

同じ獅子王、しかし、違う獅子王。あの宇治川の合戦で、頼政の元にあり、なお折れなかった獅子王だ。

それを鞘へと納め、妖忌は静かに告げた。

「……美濃の土岐光定は、摂津源氏と同じ源頼光を祖に持つ源氏の末裔だ。彼であれば、源三位の志を理解し、この太刀を正しく伝えるだろう。彼を預け、伝えるには十分なはずだ」

「待ちなよ」

全ては済んだとばかり、獅子王を手にし立ち去ろうとした妖忌の背中に、ぬえは声をかける。

少女はその手に斬り落とされた獅子王の「長さ」を拾い上げた。

鞘の中に残る小さな太刀のかげら。獅子王が失ったかつての『因果』それを握り締め、己の二の腕に深く突き刺す。ぶしゅう、と噴き出す血は——人と同じに赤い。

「——斬られた長さだつて、忘れられていいわけがない。違うか、死神」

ぬえはひときわ強く念を凝らした。残る全身全霊の力を降り出し、渾身の力を込めて正体不明の種をつくつて、獅子王の斬られた「長さ」に籠める。

ざわり。ぬえの手の中で大太刀の断片がもぞりと動き出した。

しゅうしゅうと風に溶けるように黒い闇の塊となった「長さ」は、不定形な四足の獣の姿となって、妖忌の手にする獅子王に絡みつく。

「二尺五寸五分じゃない。三尺五寸五分でもない。その両方であつて、そのどちらでも

ない。それが、こいつだ。頼政の獅子王だ」

長さも、謂れも、拵えも、曖昧な太刀。

それは——正体不明の〈鶴〉を討った、源三位頼政の太刀に、きつと相応しいはずだ。

『どういふ心変わりだ。お主からこやつに因果を結ぶなど』

「氣まぐれだよ」

獅子王が、出会ったときからずっと望んでいたこと。

もう、この世にはいない持ち主との縁。それを繋ぐのが、正体不明の化け物だというのは随分皮肉なものだと、ぬえは口元を歪めて牙を覗かせる。

己の腕を流れる血を見つめながら、ぶつきらぼうに、ぬえは答える。

「もう一つくらい、わたしを繋ぎ止めるものがあつたっていい。そう思っただけだ」

鶴退治の源三位頼政の剣。黒漆糸巻拵太刀、獅子王。

ぬえは地を蹴り、身を震わせてあらたな三対のいびつな翼を降り出した。左右非対称の羽根をためかせて、死神を地に残し夜空へと舞い上がる。

わずかに欠けた満月の下、にわかに湧き起こる黒雲が星空を覆い、少女の身体を取り巻いてゆく。

広がる闇の中。ぬえは鳴く。喉を震わせ、空に啼く。

（獅子王。お前が、もし、また人の姿を持ったら）

——いつか、また、このみやこで。

ひゅおおおう、ひゅおおおう。

遠く、再開を誓いながら。少女の悲しき鳴き声が、夜の都にこだまする。

うらなくぬえどりの啼き声は、別れを惜しむかのように、いつまでもいつまでも響いていた。

(了)

## 【奥付】

### 「ぬえと獅子王」

初版 平成27年11月1日 東方紅楼夢11

第二版 平成27年12月30日 C89

オルハザカサンパンチ

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは

著者: 銅 折葉

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。



新築坂三番地